

師 範	藤井登六、丸山和、助金早人、原秋雄	各鍊士	
南加聯盟會長	橋本數市	沿岸聯盟會長	壽村逸發
北加聯盟會長	岡田治郎	サンオーキン聯盟會長	藤森壽一
中加聯盟會長	白川時夫	西北部聯盟會長	奥田平次
理事(各支部長)			
布哇ホノルル支部長	木下白夫	本部劍友會々長	西貞助
亞郡支部長	野村友次郎	コンコード支部長	池田介雄
ワツソソビル支部長	木塚徳繁	モントレイ支部長	兒玉節二
キヤンベル支部長	川本猪平	サリナス支部長	安部万造
セバストポール支部長	横山六左衛門	スースン支部長	岡田治郎
バカビル支部長	古屋泰治	スクラメント支部長	池永與造
ルーミス支部長	眞壁信藏	メリスビル支部長	森岡治郎
オーバン支部長	津田勝一	大正區支部長	井上豊次
フロリン支部長	谷川玉藏	スタクトン支部長	林野重昭
ローダイ支部長	田村健一	マデラ支部長	二階堂一男
バイオラ支部長	森田徳顯	フレソノ支部長	長岡重彦
フアラ支部長	白川時夫	リードレー支部長	桂岡源輔
ダイニューバ支部長	福島群一	バイセリア支部長	石居源一
ハンホード支部長	羽原末吉	デラノ支部長	吉原佐一
リンゼー支部長	木元宇吉	リビングストン支部長	前田芳太郎
ベカスフキルド支部長	大熊範一	サンビドロ支部長	河内幸次郎
ドミングスヒル支部長	宮川誠	ロングビーチ支部長	二村好次

ノーオーク支部長	板谷順造	ポートランド支部長	犬塚隆
シヤトル支部長	奥田平次	サウスバーク支部長	久安龜一
ホワイトリバー支部長	水野嘉四郎	サムナー支部長	杉原宇太郎
タコマ支部長	高島八郎		
在米、北米武德會後援者			
◎南加地方 伊藤竹次郎、大倉百太、荒谷節夫、山本逸雄、奥武朝道、南彌右衛門、石井忠平、徳山實太郎、江藤爲治、永野芳雄、土肥説吾			
◎沿岸地方 岡田松太郎、竹下政幹、新田秀敏、武田左文司、古賀眞馬、栗屋勉、堀田重雄、堀田千年、石川信吉、峰田國作、岡垣吉太郎、柴田善十郎、杉野太一郎、矢幡富藏、兒野彦太郎、中野作太郎、淺野七之助、安孫子ヨナ子、太田敏夫、阿部豊治、三原時信、永田繁、片山倫、芦澤榮訓、芦澤履、島内良延、糴井一劍			
◎中加地方 小此木文九郎、龜野景治、平智山、荒木政雄、瀬戸口豊吉、川野吾八、尾形正、佐野繁、藤井茂美、山口正義、池宮長吉			
◎サンオーキン地方 秋本研介、大橋貫造、遠藤照治、小室昌一、木村興信			
◎北加地方 佐藤力太郎、沖健次、南部源哉、神原茂音武、人見多作、青木儀一、川本森楠、小畑烈子、松尾義三、合田源四郎、佐々木三郎、中村信二郎			
◎西北部地方 小山巖、松浦政二、廣村喜久男、川尻慶太郎、馬見塚松藏、白石萬之助、及川秀夫、林良章			

第五章 役員及び後援者略歴

北米武德會々長
在米日本人會顧問

塚本松之助



安政四年一月、千葉縣香取郡山倉村に生れ、明治二十年、慶應義塾を卒業するや、福澤諭吉、中村道太等の主唱に賛意し、米大陸に於ける農業經營の目的を以て渡米、桑港に上陸、直ちに沿岸サンノゼ地方に於て企業せるも蹉跌し、後事業資金を得る爲め、洗濯業を開始せり、これ邦人スチーム洗濯所の嚆矢となれり、爾來白人同業者の壓迫迫害を蒙ること三十餘年に至るも、頑として之に拮抗し、遂に大正九年三月初志を貫徹、諸權利を買収して、現住所にビープルス洗濯所を建設經營し今日の隆盛を見るに至れり。夙に公共團體に盡瘁する所深く、八十の高齡猶矍鑠として北米武徳會々長の榮職に就き、二世青年指導の爲め献身するの外、在米日本人會々長、桑港、日本人會々長にも數度就任し、同胞社會の福祉増進と融和協力に努力せり、家族七人あり、子息皆な最高學府を卒業して獨立し、物的心的にも誠に恵まれり。(165 10th St. San Francisco, Calif)

北米武徳會々祖 劍道教士 中村 藤吉
北米武徳會總師範

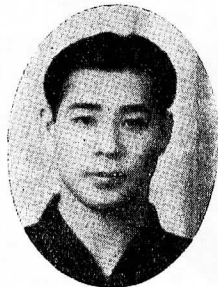


明治二十年八月廿九日、福岡縣浮羽郡田主丸町に父半三郎の長男として生る、幼時より吉瀬善五郎に就て劍を學び、渡鮮後京都に上り、内藤高治、中野宗助に師事し、大正五年三段允許さる。直ちに歸鮮し龍山武徳館を設立して、青年指導に任り、昭和四年布哇經由て渡米、爾來十餘年間に北米武徳會を創立。數回武者修業團を組織して歸朝し、在加州、央州、華州の沿岸三州に劍道を廣め、六個聯盟と五十有餘の支部を建設、子弟壹萬を突破するの成績を示せり。大日本武徳會より教士號を拜授し、昭和十二年歸朝するや、母國朝野名士の後援を借りて、現東京

の住所に、北米武徳會 皇道學院を新設し、在米二世劍士二拾數名を養成せり。妻ツネとの仲に太郎、藤雄、榮子、日那子の二男二女ありて忍苦十年派闘の功なり、家庭的にもまた大に恵まれり。(在日本住所 東京市杉並區天沼町三丁目六四六番地、在米國住所 1701 Laguna St. San Francisco, Calif)

大日本武徳會練士 北米武徳會客員 森 寅雄

大正三年六月廿一日、群馬縣桐生市に生る。弱冠八歳より野間道場に通ひて劍を學び、天稟の劍技既に幼時より認めらる、巢鴨學園卒業後、直ちに報知新聞社に入社、昭和十一年四月、滿洲派遣軍戰車第四大隊に入營し、護國第一線に立ち



て活躍せり。昭和十二年一月除隊後歐米フエンシング研鑽の目的にて、大日本アマチュアフエンシング協會 海外 研究員として布哇經由渡米し、布哇及び南加州に於ける劍士等を指導し、昭和十三年三月、南加に於けるフエンシング・チャンピオン・シツプを獲得、日本武道の爲め大に氣を吐けり。在米中、北米武徳會南加聯盟總師範藤井登六練士の懇請に依り、サンビドロ、ドミングスヒル、ロングビーチ、ロスアンゼルス各支部劍士に親しく教

授し、昭和十一年七月には、前記支部劍士拾二名を引卒せる藤井登六練士一行と共に、加州各地の北武支部よりオレゴンワシントン兩州の支部を歴訪し、到る處技神に入る劍の業を示すと同時に、劍士の起居動作、試合の形、劍技等に刷新改良を加へて、大に見る可きものあらしめり。昭和十三年春、南加フエンシング會を代表して東部に遠征し、見事優秀なる技倆を發揮してチャンピオン・シツプを獲得し、同年六月歸朝し朝知新聞社に歸社せり。(東京市小石川區音羽町講談社)

慶應元年、新潟縣水原町に生れ、明治十五年東京に遊學し、同十八年渡米、桑港に定住、福音會に入りて會長に推され、多數の後進者を指導養成せり。同卅一年「日本新聞」を獨立創刊し翌卅二年「日米」と改題爾來三十七年間社長として、日米兩國及び在留民の爲め健闘し母國政府より、其の功勞に依り勳五等を拜授せり、資性綿密沈着、事業慾に燃え日本勸業社を起して、鐵道、炭坑、農園等に工夫を供給したり、加州リビンガストン、コーテズ地方に大和植民地を建設したり、南加羅府に姉妹新聞「羅府日米」を創刊したり、常に理想の實現に邁進して終生せり。一九三六年病ひを得て遂に再起し得ず同年六月死亡。生前北米武德會の事業に多大の興味と深き理解を持ち、言論を通じて之れを後援し、武德會今日の隆盛發展を齎せり、没後新聞社は妻ヨナ子社長に推舉され、依然として北武の後援に意を注げり。夫婦の間に一子康雄あり、目下英文編輯部にて活動中なり。

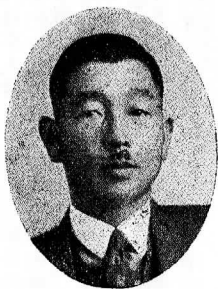


北米武德會後援者
桑港日本人會監事 中野作太郎

明治十四年、福岡縣後羽郡竹野村に生る。同三十二年五月、中學中途退學渡布し、數年後米本土に轉ずるや、桑港に定住し、同四十三年加州ホテルを新築經營、昭和二年十一月には上町日本人街に移轉し、最新式の設備を以て斷然他を壓するの業務となり、昭和五年十一月、南加羅府東一街に沿岸屈指の大旅館都ホテルを共同經營し、爾來今日に至る。夙に公共團體に貢献する處厚く前桑港日本人會副會長、福岡海外協會支部長

旅館組合長等に歴任し、善くその責任を全ふせり。殊に劍道には深き理解を有し、北米武德會創立以來、時に相談役となり、時に本部の理事となりて盡力し、會發展の爲め貢獻せり。夫婦の仲に長男孝雄一女春枝あり。(1701 Laguna St. San Francisco Calif)

北米武德會後援者
カタルーブ日本人會顧問 荒谷節夫



廣島縣西條の産、明治卅七年、日露戰端開始の年、縣立尾道商業學校を卒業するや、將來の活躍地を北米の天地に求めて、翌三十八年勇躍渡米し、桑港に於て學僕の傍ら語學を研磨すること一年後、南加羅府に轉じて農業に従事し、アーケデア、モネタ、サンフアナンド各地を経て、大正十二年現住地に來移、直ちにカタルーブ農産商會を創業し、各種農産物の耕作と東都輸送の二大業を兼營し、爾來十五ヶ年間に及び、業務躍進に次ぐに飛躍擴張し、當地及び隣市ランポークに五千英町の農耕地を獨力經營するに至り、今や沿岸カタルーブの荒谷に非らず南加、否、加州の荒谷として遠く東都市場に名聲を博せり。資性頗る穩健、且つ沈黙寡言、良く清濁併せ呑むの雅量に富み、眞の平和主義者とは彼の事なり。特にスポーツには狂的の趣味を持ち、嘗て荒谷野球團を組織して、日本遠征を企てし事あるの外、ゴルフを巧みにし、フットボールを好み、柔劍道に深き理解を有し、中村教士來講せし際は、南、中瀬と共に大に盡力、今日猶陸陽の後援を惜しまず、北米武德會の爲め貢獻せり。公共團體に彼の貢獻せる事は殆んど枚擧に遑なく、當地日本人會長たるの外、總ゆる團體の首腦となりて、地方在留民の福祉増進と、融和親睦に努めり。昭和九年二月、帝國産業協會伏見總裁官殿下より「産業界」の功勞者として表彰の光榮に浴せり。先年糟糠の妻良子を失ひたるも

縁家より壽満子を迎へ一家春風駘蕩たり、一子哲夫は目下慶應大學に在校中。(P. O. Box 56, Guadalupe, Calif)

北米武德會設立功勞者 柴田善十郎

明治十三年、福岡縣糸島郡深江村に生る。明治卅七年、日露の國交急なる年に渡米し桑港に上陸するや、語學を究むる傍ら花園業に従事すること數年にして獨立經營者となり、大正六年に至りて現住所に土地を購入し三拾數棟のグリーンハウを建築、爾來今日まで一步一步と健實なる基礎を築き斯界に於ける元老となれり。一九一二年加州花卉市場株式會社を創立して同業者の福祉増進を圖り推されて重役となり社長となるの外、同胞社會公共にも寧日なき貢獻する處あり、歴代日本人會々長に選舉されて善く其の職責を果せり。又、日本武道の精華たる劍道に深く理解と趣味を有し、北米武德會教士中村藤吉來講するや、自ら卒先して劍道の普及宣揚に努めマウンテデン支部設立、北米武德會本部設立等に物心兩面に多大なる功勞あり。最近彼は花園の表庭に萬金を投じて巧緻を極めし日本の庭園を築き、風佳な茶寮をも建築、日米人を招待し、大に兩國の親善にも努力せり。夫婦間に數名の愛兒を儲け家庭的にもまた恵まれり。(Mt Eden, Calif)

北米武德會後援者 南 彌右衛門



明治十三年、和歌山縣西牟婁郡江住村に生る。明治卅八年三月、二十五歳の壯年時に渡布し、同年五月大陸に轉航するや、一時海濱モンントレーに止どまり、同四十年現住地に轉じて、ユニオン製糖會社直營の農園に就働せり。大正六年獨立して百七十英町の砂糖大根、ビーンズを耕作し、漸次農耕地を擴張して、大正九年には千二百英町を經營。此の頃

より、在米唯一の豪農となる素質を現し、大正十四年に至りて、砂糖大根の耕作を一蹴、野菜栽培に轉じ、業務年々歳々擴張して五千英町を經營し、在米同胞中、第一番の大農となれり。昭和四年「南父子農産商會」を創業し、生産と販賣とを共營し年三百萬弗の取引をなしつ、今日に至れり。資性溫和圓轉、大事に豪膽なるも、小事に細心の注意を拂ふ用意周到の質にして、文字の如く刻苦精勵今日の巨富を積み。夙に公共團體に貢獻すること厚く、農會理事長、青年團長、縣人會長、日本人會長、學務委員長とを歴任し一九三七年には南加中央日本人會々長の要職に就き、よく責任を全ふし、同會の顧問に推舉さる。昭和十年、帝國産業協會伏見總裁宮殿下より「産業界の功勞者」として表彰され、家門の爲め大に面目を施せり。妻クニとの仲に四男一女あり、長男彌太郎、二男芳松は、父業を繼ぎて業務に精勵せり。一九三八年七月亡母法會の爲め妻同伴歸朝し、朝野の歡迎を受けたり、一九三〇年中村教士當地來講の際は、荒谷、中瀬と共に後援し、その後引き續いて北米武德會事業發展の爲め貢獻する所多し。(P. O. Box 48, Guadalupe, Calif)

アラメダ日本語學園學務委員長 アラメダ支部設立功勞者 兒野彦太郎



明治廿一年、和歌山縣那賀郡池田村に孤々の聲を擧げ、少年期より海外發展の雄圖に燃え、明治四十年(一九〇七年)若冠十九歳にして勇躍渡米桑港上陸、直ちに官立學校に入りて語學を研鑽すること數年後、北米貿易會社に勤務せり。大正六年(一九一七年)灣東アラメダ市の林切花店を譲り受けて獨力經營し、爾來廿一年間刻苦精勵して今日の成功を見る。資性轄達にして細密、且つ義侠に富み、他人の世話を善くし、後進者の指導に

また努力する處厚く、殊にスポーツには多大の趣味を持ち、野球、蹴球、西洋相撲、日本相撲、剣道等には世話役として彼の名を見ざるることなし。曾つて日米人に成る兒野球團を編成して、前後二回母國を遠征し、兒野球團の名聲を博せり、此外夙に社會公共團體に盡瘁すること厚く、亞市佛教會理事長、日本語學校學務委員長、日本人會會長等の舉職に歴任して、能くその責任を全ふし、在留民の融和と福祉増進の爲め活躍せり。北米武德會の剣道講習當初より心的にも物的にも貢献する處深し。良妻賢母の典型的たる先妻を失ひ、後妻千代子を迎へ、長男敏夫、長女榮子、二女富子、三女千鶴子の一家六人恰も春風駘蕩の如く圓滿なり。長男敏夫は當地ハイ卒業後、姉榮子と共に父業を繼ぎ、二女三女共に現在ハイスクール通學中。(2305 Santa Clara Ave, Alameda, Calif)

北米武德會後援者 江藤 爲治
サンルイス日本人會顧問



明治卅五年、布哇より轉航直ちにエスビー鐵道會社に就職し、サンルイス、オピスボ市に來り間も無くクラウン花園種子會社に轉從せり。其後實兄多久龜吉、實弟永野芳雄來訪し、兄弟三人協力して、獨立種子園を經營し同胞斯業の元祖となれり。業務の發達に伴ひ實兄實弟と分立し、彼は獨力野菜耕作に轉じ、二百英町の農園を購入、更らに八百英町餘借地して、専らビー、トメト、レタス種子等の栽培に刻苦精勵し、今日の富をなせり。

彼は徹底したる永住土着論者にして、二世の將來を慮ること實に深く、自ら甘んじて捨石たる覺悟を有し、一擧手一投足、これ皆な次代同胞伸展の礎とし、日米人の融和親睦に心血を注げり。當地米人商業會議所幹部等も、彼の不斷的なる貢献を認めて、彼を記念すべく市街の名に『江藤街』を命名して、彼の功徳を讃えり。更らに昭和九年には、帝國産業協

會伏見總裁官殿下より、『産業界の功勞者』として、表彰されるの光榮に浴せり。資性剛健膽斗なるも、反面涙もろき情の人にして、良く朋輩、後進者を救済し、自ら痛しく窮地に陥るも微動だにせず、直往突進する氣魄を有せり。今や當地の元老となる。富成り、名遂げたるも決して榮華の生活をせず糟糠の妻タタと共に、廣き農園に自然の大氣を吸ひ睦じく働けり。剣道に興味を持ち、中村教士の講演、講習に力せる事深く、今猶陰陽に盡せり。夫婦の仲に一男七女あり、心的にもまた大に恵まれり。彼の實兄多久龜吉は隣村ピスモにありて大成し、實弟永野芳雄また隣村モーローに永住して、堅農の名聲を博し、兄弟三人共に成功せる在米同胞中稀に見る模範を世に示せり。(P. O. Box 220, San Luis Obispo, Calif)

北米武德會設立功勞者 野村友次郎

福岡縣浮羽郡水繩村に明治十五年一月生る。明治卅六年勇躍渡米桑港に上陸し、灣東地方に入りて葎園を經營せるも花園業の將來性あるを看破するや直ちに轉身し、夫婦協力、善く刻苦精勵せる甲斐あつて業務は年々擴張され、今日六英町の土地家屋と、拾數棟のグリーンハウスを所有し、地方同業者中の逸材として廣く知らるるに至れり。資性剛毅綿密、事業の經營に最も適せる性格を有し、彼の研究になるカーネーション、ローズ、ガゼニア等は遠く東部市場にまで名聲を謳はれり。彼はまた社會公共團體にも常に盡瘁し福岡海外協會、學園等の幹部たるの外、北米武德會の創立にも一方ならぬ貢献する處あり、長女春香は劍道鍊士原秋雄に嫁し、次女靜枝、長男政記三名に劍を學ばしめて皆有段者たるの伎倆を會得させ、長女春香は昭和七年第一回日本遠征劍道團員として渡日見學をなさしむ。(San Lorenzo, Calif)

北米武德會後援者 故中瀬福太郎
前ガタルーフ日本人會長

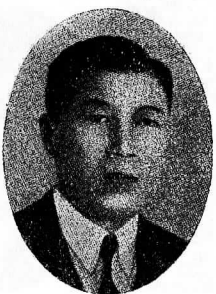
明治元年八月十八日に生る。長じて日清、日露の兩戰役に從軍し、日露戰爭凱旋後直ちに渡米するや、南沿岸ガタルー
 プに來り、數年の後、食料雜貨商を開業し、爾來殆んど三十年間永住、夙に公共に盡す所深く、日本人會長、學園委
 員長、佛教會門徒代表、縣人會長等々の要職に就き、よく其の責任を果し、業務また大に興隆せるも遂に病ひを得て死
 亡す。生前、中村教士が當地に劍道の講習を開始するや、心身擲つて後援せり。妻キクノとの仲に達夫、與一、孝治の三
 男あり。(原籍地 和歌山縣西牟婁郡江住村)

北米武徳會名譽講師 岡島金彌
 前シヤトル移民局通譯官



明治維新の大業成つた元年三月十八日、鹿兒島縣出水郡高尾野の寒村に生る。弱冠十四
 歳にして長崎に出で英語を學び、十七歳の年上京し明治會學校英文科に入學、同二十二
 年六月同校を卒業するや神戸に轉じ、兵庫縣廳通譯となるも、青壯氣銳の彼の忍ぶ處に非
 ず、海外雄飛の希望抱いて明治二十五年、渡米、直ちに、コロラド州デンバー大學に入學
 同校を卒業するや、多種の事業に手を染め民族發展の爲め奮闘せり。後、ワシントン州シ
 ヤトルに移移民局通譯官を奉職、在勤十三年間長く初代同胞渡米の便宜を圖れり。晩年は母國政界出馬を志したるも遂に
 中途にて斷念し、南加州羅府に轉じて悠悠自適の生活をなせり。一九三七年一月より北米武徳會の爲に大に盡瘁し、得
 意の英語雄辯を以て、二世指導教化の爲め八方講演し、大に貢獻する所ありて今日に及ぶ。白婦人の妻、十三年前に死亡
 し、夫婦の中に一男三女ありたるも、一男を亡くし、三女のみ生存す。(4638 Lily Crest Ave, L. A. Calif)

北米武徳會後援者 石井忠平
 前ガタルー日本人會長



明治二十年、福岡縣嘉穂郡宮野村に生れ、若冠十八歳にして勇躍渡米、先づ將來發展の
 要素たる語學を學び、コロラド州に突入して農業を經營せるも、後人夫請負業に轉身し、
 同オテロの灌漑大工事を請負ひ一躍名聲を博せり。翌年南加州に轉じてエス、ビー鐵道會
 社の沿線監督となり、爾來拾有六年間精勤中、偶々歐洲の大戦に際會するや、鋼鐵の暴騰
 を奇貨とし、沿岸に難破沈没せる汽船サンタロサ號を購入引き上げ工事に著手せる事ある
 も、戰亂終局を告げたる爲め中止せり。資性豪膽にして緻密、また玄海人特有の俠氣に富み、長く後輩を引立てり。エス
 ビー會社退社後は、現住地に商家屋敷地を購入して、和洋雜貨食料品商を開業し、年額六拾數萬弗の商賣をなし、沿岸
 屈指の實業家として斯界にデビューせり。夙に公共團體に盡し、嘗つてガタルー日本人會々長たるの外、總ゆる團體
 の幹部に推舉され、よくその責任を全ふせり。夫婦の中に三男あり、妻フタバまた大に内助の功あつて婦徳高し。(611 W
 Main St, Santa Maria, Cal)

北米武徳會後援者 奥武朝道
 前ロスアンゼルス日本人會々長

明治十九年沖繩縣那覇市の尙家門閥に生る。郷里の中學卒業後上京せるも、海外發展の壯圖に馳られ、明治卅七年勇躍
 渡米、數十年間語學を學び、南加州ロスアンゼルスに轉じて農業に従事せるも意の如くならず、後洋食店に轉身し、オリエ
 ンタル珈琲店を市内目抜き場所に開業大に殷賑を極めり。資性實に濃厚篤實、且つ俠氣に富み、幾多の後進者を庇護指



開業のオリエンタル、カフェーを經營今日に至れり。(3624 W. 3rd St. L. A. Calif)

オークランド支部功勞者 ドクトル 矢 幡 富 藏
オークランド日本人會々長



に専心し、北米武徳會の事業に多大の貢獻あり。家庭は妻憐子との仲に正郎、豊 鈴子の二男一女ありて、心的にも物的にも大に恵まれたる家庭生活をなせり。(518 8th St. Oakland, Calif)

北米武徳會後援者 徳山實太郎
ランポーク日本人會幹部

廣島縣の出身にして明治廿三年に生る。郷里の中學卒業後、海外發展の勇圖に燃へて渡米、學僕をしながらハイスクー
ルを卒業後、南加羅府にて商業に従事せるも、ガタルーブの豪農荒谷節夫に招かれてランポーク支店長となり、大に活
躍今日に至る。資性安藝人の共有性と異り、直情徑行、義に堅く俠に富み、熱情の迸る處直往邁進して、毫も利慾を
念とせず、良く業務に献身せり。夙に武道に理解と趣味を持ち、北米武徳會の爲め、陰陽に盡す所深し。夫婦の仲に一男
二女あり。妻また大に内助の功ありて家庭は常に春風駘蕩たり。(P. O. Box 96. Lompoc, Calif)

北米武徳會後援者 太田敏夫
新世界朝日編輯長

廣島縣の出身にして語學研究の爲め渡米し、ハイスクール卒業後、新世界新聞社に入社大に健筆を揮ひ、其後北米朝日
新聞社と合同し、三原前編輯長總務となるや拔擢されて同紙の編輯長となり爾來今日に至れり。穩健なる資性は善く在留
民と融和し、同社伸展の爲め大に力あり。北米武徳會の事業に特に後援の筆を持ち、同會發展に貢獻せる處甚大なり。
(1618 Geary St. San Francisco, Calif)

北米武徳會後援者 永田繁
日米新聞記者

明治廿二年京都市に生る。同志社大學卒業後東京報知新聞社に入社、後大阪支局長に榮進せるも、平林組に招聘されて
實業界に入り一九二一年布哇經由渡米、其後日米新聞社に入社爾來今日に及べり。資性豪放膽斗、よく酒を愛するも決し
て墮せず、極めて上品なる愛酒家なり。北米武徳會の事業に深く理解を有し、同會の事業發展の爲め屢々健筆を揮ひ、又
は得意の辯論を以て二世を指導せる事多し。(650 Ellis St. San Francisco, Calif)

北米武徳會後援者
ギルロイ日本人會幹事 古賀眞馬

明治十七年、福岡縣朝倉郡宮野村に生る。廿一歳の年、明治三十八年勇躍渡米、現住地にあること永く、地方公共團體に貢獻して當地の日本人會幹事、福岡海外協會佐市支部救済部長、日蓮教會支部長たるの外、剣道には特に力援し、中村教士來講當時より獻身的に之れが發展擴張に努力せり。常に日蓮の徳を偲び心身俱に淨らかな生活をなし、妻マスの仲に十二人の子實を持ち大に恵まれり。(139 S. Monterey St. Gilroy, Cal)

北米武徳會前師範 劍道五段
皇道學院主事 鍊士 芦澤碩純



明治二十八年一月十六日、山梨縣東山梨郡日川村に生る。幼名鑑と稱ひ碩純と號す。郷里日川中學卒業後上京し、中山博道に劍を習ひ、明治大學の有信館道場に於て劍を修業し、大正三年渡米、加州各地に活躍すること二十年、その間日本劍道の宣揚に努力する事多く、昭和四年、中村藤吉教士の來講と共に入門し、劍道三段を允許され、サリナス、華村、モンテレー三支部師範に推舉される。同七年四月、北米武徳會北加聯盟設立と同時に初代總師範となりて九支部の青少年劍士を養成指導する傍ら、オーバン邦語學園長に招聘され、續いて隣村ルーミス學園長をも兼任す。同年中村教士より四段を允許さる。昭和八年二月、ルーミス學園長を辭し、櫻府學園教師を兼任。同九年十二月、リビンググストン、コーテズ二支部の劍道師範をも兼攝し、昭和十一年二月、大日本武徳會本部より劍道五段を允許され、同年五月劍道鍊士號を拜授せり。昭和十一年十月再渡米同年五月歸國、昭和十二年十一月中村藤吉教士歸國し北米

武徳會皇道學院設立と共に其の主事となり、海外より來る二世青少年指導教化に努力せり。昭和十二年四月、東京目黒區警婦協會家庭學校の修身科專任講師に招聘され、皇道學院主事たるの傍ら之れをも受持ち今日に至る。著書『武士道精神と人物養成』あり。(東京市杉並區天沼三丁目六四六、皇道學院内)

前中央支部總師範 劍道五段
北米皇道學院師範 鍊士 丸山和



昭和八年三月、東京國士館第一期に卒業し、齋村、大島、持田三師範の紹介にて北米武徳會中村教士と會見し、大に意氣相投じて同教士と共に、昭和八年五月渡米、桑港に上陸。約四ヶ月間中村教士に隨伴して、加州各地支部を巡歴教授し、北米武徳會本部に足を

止めて師範を爲す。同年第一回の夏期武道專修學校を開校し、その主任となつて指導教授せり。昭和九年三月、南加聯盟を三ヶ月間巡教し、同年六月、中加十支部の總師範となりて大に活躍せり。昭和十年一月歸朝、朝鮮武徳館師範となり、京城齒科醫專門學校の劍道師範を兼ね、憲兵隊にも傍ら教授せり。昭和十一年七月再び渡米し、中村教士と共にワシントン、オレゴン兩州に劍道講習旅行を續けて數個の支部を建設し、同年十月より中央支部總師範としての傍ら同州大學に入學し専ら語學を研鑽しつゝ、二世後進者の指導教化に活躍せり。昭和十三年四月、西北部聯盟總師範たる原秋雄四段渡日するや、其の後任となつてワシントン州支部に轉じ、同年七月原師範鍊士號獲得歸米後、北米武徳會皇道學院の招致に依り同年八月歸朝し學院劍道師範として若き二世劍士等に語學と劍を教授し、中村皇道學院々長を大に補佐して、着々業績を擧げつゝあり。(東京市杉並區天沼三丁目六四六番地、北米武徳會皇道學院劍道師範)



北米武徳會師範
天道流薙刀録士 眞壁かほる

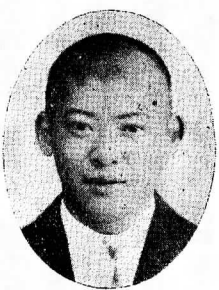
大正二年、加州ルーミスに眞壁信藏の三女として生る、昭和六年オーバン市のブラサー
ユニオン、ハイスクールを卒業後、翌七年二月北米武徳會中村教士の門に入り、剣道の講
習を受け、昭和八年北米武徳會剣道母國修業團に加はり渡日し、同年九月より京都大日本
武徳會本部の薙刀部に入門し、美田村千代範士より天道流薙刀術を學び、昭和十一年五月
練士號を受く同十三年七月歸米し、北米武徳會專屬薙刀師範として後進二世女子を指導し

ジョージ。 (P. O. Box 314, Loomis, Calif.)



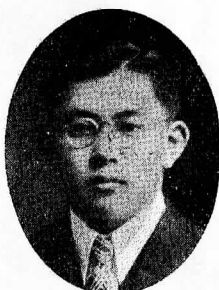
北米武徳會劍道皇
生學院學道皇
喬本山

一九一八年四月二十四日加州サンピドロに生る。同地のダナ・ジュニア・ハ
イスクール二年にて中途退學し、中村藤吉教士の門に入りて爾來劍道の修業
を續け、曾つて中加聯盟及び西北部聯盟の師範たり。一九三六年三段を免許
され、三十八年六月四段に昇進し、現在北米武徳會皇道學院に在りて劍道を
學び、國士館中學に通ひ日本語を學べり。(東京市杉並區天沼三ノ六四六)



北米武徳會劍道皇
生學院學道皇
雄光村中

一九一七年四月九日、加州センタービルに中村巳作の二男として生る。同地
ワシントン、ユニオン、ハイスクール三年にて退學し、自動車學校に學びし
も、一九三二年中村教士來講するやその門に入つて劍道を修業し、爾來今日
に及ぶ。一九三七年中村教士と共に渡日し、北米武徳會皇道學院にて劍道を
修練し、國士館中學校に通ひ語學の勉強に専念せり。一九三八年六月、三段
を允許さる。(東京市杉並區天沼三ノ六四六)



北米武徳會劍道皇
生學院學道皇
男政邊渡

熊本縣上益城郡七瀬村出身渡邊政雄の長男として一九二〇年中加ダイニユー
バーに生る。ハイ・スクール二年在學。學業に精勵すると共にスポーツマン
として名あり。フット・ボールのチャンピオンたり。中村教士に入門して劍
道に精進し、一九三七年春初段允許を受く、同年十月中村教士と共に訪日、
皇道學院に在り、日語研究の傍ら劍道の修行中なり。(同上)



北米武徳會劍道皇
生學院學道皇
光政岡石

一九一八年八月十八日、ワシントン州ワルビルに石岡政次郎の長男として生
る。幼時タコマ市に移り同地のリンコロン、ハイスクール卒業するや、中村
教士に引牽されて渡日し、皇道學院に劍道を學び、國士館中學校二年生在學。
劍道は一九三六年中村教士の門に入り翌三十七年の大會に於て個人優勝し日
米新聞社寄贈の銀盃を獲得、一九三八年六月中村教士より初段を允許さる。
(東京市杉並區天沼三ノ六四六)